分科会「ろう手話の歴史」

助言者：米内山明宏／司会：野呂　一／記録：佐藤　聖

１日目は、参加者全員に自己紹介を兼ねて高橋澄さんの講演を聞いて感じたことを述べて頂きました。皆さんの緊張が解れたところで、米内山さんからいろいろと解説して頂きました。運良く参加者の中に高橋澄さんの娘さんがいたので、一層と盛り上がりました。

高橋さんは普段は仙台の手話で話しているのですが、講演が始まったとたん、コードスイッチングされたのか、間違いなく大正時代の東京聾唖学校の手話で話し始めました。思わず目を疑ってしまいました。初等科時代の担任だった山中福代先生についての思い出を語る内容でした。高橋さんにとって山中先生は、かけがえのない手話のよき「モデル」であったのでしょうか？高橋さんが中等部に進学した時に口話法が導入され、何人かいたろう教師が全員クビにされてしまいました。こうして、手話のモデルを失ってしまった子供たちは、先輩たちの手話を見ながら自ら手話を作り出してしまう、いわゆるクレオールの状況を生み出していったようです。（野呂さんの後日談から）

２日目は、上野益雄さん、米内山さん、野呂さんの講義に終始しました。無事に全ての日程を消化しました。演題は次の通りでした。

上野さんは「欧米聾唖史のキーポイント」。

長期にわたってアメリカのろう教育史を研究されていた上野さんは、「何故、口話法でなければならなかったのか？」「何故、手話は厳しく禁止されてきたのか？」について、体系的にわかりやすく解説していただきました。その裏付けとなる資料、写真等の紹介もありました。その研究成果に共感を覚えた方も多かったようです。

※【手話コミュニケーション研究　No.47】（発行：日本手話研究所）に掲載されているので、ご参照下さい。

米内山さんは「手話にも方言がある」。

地方の聾学校の設立やろう者教師の全国的な配置によって手話が伝播されていき、ろう者の言語として発達していったのだろうというお話をされました。また地方独特の手話が多く残っており、その保護や分析研究が重要であると強調されたことに共鳴を覚えた方も多かったようです。

※【言語　Vol.32 No.８】（発行：大修館書店）に掲載されているので、ご参照下さい。

野呂さんは「聾唖教授手話法」。

これは「明治35年に刊行された古いわが国の手話辞典」という貴重な本です。原本は鹿児島県立図書館に保管されています。手話の表現方法の説明は、動画、写真、イラスト、記号などは使われていなくて、すべて文章で書かれています。全20章のうち「時の部」を取り上げて参加者に実演してもらい、現在の手話と明治時代の手話を比較しました。また、その本がもつ背景などを歴史学的観点から分析したことをお話しされました。

この分科会に参加された皆さんにとってはかなり収穫が多くあったのではないかと思います。「手話の歴史」のイメージがつかめたことで手話に対する造詣が深まったことと思います。手話の歴史を研究することは、ろう文化を考えていく上で一番重要なことです。ろう者だからこそ持てる視点を活用して取り組んで欲しいと思います。残念ながら今回はありませんでしたが、次回はより多くの研究発表が出されることを期待したいと思います。